

四 季 の 訪 問

(122)

日本女性初のプロフリークライマー
スポーツクライミング解説者

尾川 智子 氏

(時習49回)



略 歴

平成9年 愛知県立時習館高校卒業

平成15年 早稲田大学理工学部応用物理学

科卒業

大学在学時からフリークライミングを開始し、競技歴わずか3年の平成15年にアジアのトップクライマーとなった。

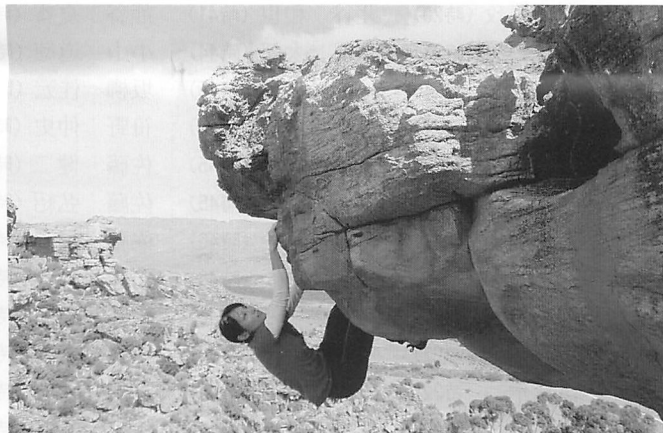
平成20年に、日本人女性初となる難度V12（ボルダーグレード）を達成。

平成24年に、世界で女性初となる難度V14を達成し、世界のトップと肩を並べる。

平成24年に世界で最も活躍したクライマーに贈られる「Golden Pion賞」、平成26年に「Golden Climbing Shoes賞」を受賞（両賞とも日本女性初）。

▼宇宙への夢を抱いた小中学生時代

出身は田原町です。小学5・6年生のときに、毛利衛さんに憧れて、宇宙飛行士になりたいと思い、理工学系大学への入学、英語の勉強を頑張ろうと考えました。中学生の夏休みには、宇宙飛行士の訓練のような感じで、日本で一番宇宙に近い富士山に登ったことがきっかけで、登山が好きになりました。山が好きというよりも、山に登ることが好きでした。



南アフリカのロックランズの岩場

▼宇宙飛行士を目指して勉強した高校時代

時習館高校では、宇宙飛行士の夢に向かって勉学に励むために、運動部をあきらめ、放送部に所属しました。伝統的にレベルの高いアナウンスを練習して、NHK全国放送コンテストのアナウンス部門で準々決勝まで進みました。大学受験については、地

元の幼馴染である同級生から勧められた科学雑誌『Newton』にはまり、その雑誌を編集していた竹内均教授が東京大学に所属していたこと、また宇宙飛行士として活躍されていた土井隆雄さんも東京大学を卒業されていたこと、さらに生物の高橋先生から東京大学の洗脳を受けたこと（東大入試の過去問題を授業で出題など）から、東京大学の理科一類を目指しました。しかし、結果は不合格。浪人時も残念ながら不合格となり、滑り止めの早稲田大学の理工学部に入學しました。

▼クライミングを始めた大学時代（前半）

早稲田大学では、本格的な物理学を学ぶ前の数学でつまずき、相対性理論が理解できず、天文学をあきらめました。部活動は登山好きなことから、ワンダーフォーゲル部に入部し、エベレスト登山を目指して、ロープワークや四つん這いで登る練習のほか、ジムでエアロビクスのトレーニングをしました。3年生の時（2000年）に大学で友達になった子が高校から国体のクライミング競技に出場していたことから、国体の山岳競技（成人の部では出場に3人必要）に無理やり参加させられ、半年後の大会を目指して猛特訓することになりました。体力をつけるために、2ℓのペットボトル6本を背負って、高尾山を2往復するという過酷な練習もありました。国体に出場できるという軽い気持ちで参加を決めてしまいましたが、友達に完全にだまされたと思い、大喧嘩しました。ただし、その練習の成果もあって、大会では総合2位になりました。

▼ロッククライミングに目覚めて猛練習した大学時代（後半）

大学の夏休みにスイス・イタリアを旅行した際に、アルプス山脈でロッククライミングを体験できる機会があり、初めて挑戦してみましたが、ウォーミングアップのレベルが登れず、悔しい思いをしました。また、偶然にも、イタリアでクライミングのワールドカップが開催されており、会場で見学したところ、平山ユージさんが優勝し、大いに刺激を受けました。

そこで、大学4年生の時に、クライミングのアジア大会に出場したいと思い、協会に連絡したところ、選考もなく出場できることになりました。現在はジュニアから育成や選考がありますが、当時はまだ人気がありませんでした。大会では、予選ギリギリで通過し、決勝の1番手で出場したところ、登頂を達成できました。その後、有力候補者がチョークバックを落としたり、コースを間違えたりして、運良く優勝してしまいました。この優勝をきっかけに、大学院や就職ではなく、クライミングで生きていこうと覚悟を決めました。両親には反対され、その後しばらく断絶状態になってしまいましたが、アルバイトを掛け持ちしながら、ジム閉店後に猛練習しました。睡眠時間を削って練習した結果、過労で入院したこともありましたが、留年した大学5年生の時に、ワールドカップの決勝に出場できました。

▼プロのフリークライマーに

クライミングで生活していくためには、少なくとも大会の参加費を稼ぐことが必要

です。そのため、企業やマネージメント事務所などのスポンサー探しや、TVやラジオなどのメディアへの営業を始めましたが、クライミングは人気のあるスポーツではないため、簡単ではなく、大学卒業時点で見通しはありませんでした。しかし、運よくフリーペーパーやテレビCMに採用されたことから、卒業1年後ぐらいに、ようやくスポンサーが付き、アルバイトを全部やめて、昼も練習に励むことになりました。収入がなく貯金を取り崩す日々が続き、ホームレスになるかとも思いましたが、必死に練習したことで、ワールドカップの決勝に進む力がついてきました。

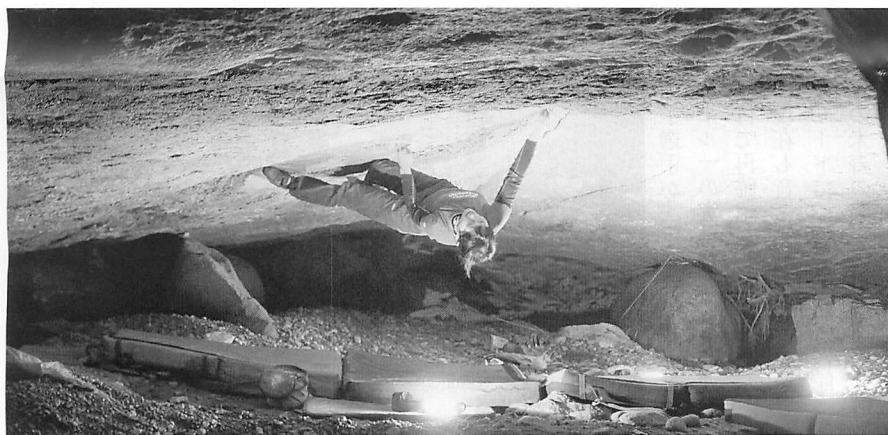
その頃、テレビ番組の『クイズ\$ミリオネア』に出場し、なんと100万円を獲得できました。この賞金により、お金の足りない生活から一息つくことができました。スタジオで観戦した父親から、「頑張れ」という声援を受けた時に、数年間の断絶がありました。このままクライミングの道を進んでも良いと感じられたことが懐かしい思い出です。

その後もワールドカップへの挑戦を続けましたが、いつの間にか後輩を連れて行く立場になり、協会も若手育成の流れになったこと、また結婚したことも契機となり、チャレンジの舞台を大会出場から自然の岩場に移していきました。

▼クライマーとしての新たな挑戦

自然の岩場では、指定されたルートを登る難易度に応じて、グレードが決められています。また、自分で安全を確保することや、映像を記録・発信（SNS等）し、実

績を評価・判定されることが必要です。2008年に、半年間の挑戦で、日本人女性初のV12（ボルダークレード）を登頂しました。その後、栃木県那須塩原市にあるV14のカタルシスに、3年間700回挑戦し続けて、2012年に世界の女性初の登頂を達成しました。当時、本当にV14の難易度なのかとの指摘がありましたが、著名なクライマーから実績を認められました。その後、栄誉ある賞も受賞しました。



V14のカタルシス

▼クライミングの講演や教育

その後、出産・子育て（長男5歳、長女3歳）で、一息つきましたが、スポーツクライミングが東京2020オリンピック競技大会の正式種目になったこともあり、現在は、解説や講演などで、クライミングの普及や発展のために活動しています。

小学生にもクライミングの魅力を感じられるように、登る壁がなくても、手や足の順番を考えて楽しく遊べる道具として、シートボルダリングを自分で考案しました。また、高齢者にも楽しんでもらえるように、体を動かさずに、指で登るペーパークライミングも考案しました。

クライミングは危険を理解した上で安全にできるスポーツであり、「登る」ことは動きの基礎のため、今後の学校教育に取り



選手村を背景に

入れてもらいたいと考えています。また、世代関係なく楽しめる生涯スポーツです。皆さんも是非体験してください。

* * * *

東京2020大会まで残り1年を切るクライミングで、フリークライマーとして活躍されている尾川さんから、苦しい生活の中でも夢を実現するという熱い想いや、大会での競争から岩場での闘いに場を移したきっかけなど、様々な話を聞くことができました。東京2020大会では、スポーツクライミングの会場で、日本選手の活躍を応援したい！と思いました。今後、「登る」という活動を広めるための講演など、チャレンジを続ける尾川さんを応援いたします。

（加藤 芳邦）



これがクライマーの手だ